

JELC えるつてる

2006年

1月号

 No.697

ルーテル/カトリック共同委員会

カトリック教会とルーテル教会との間で神学的対話が世界的なレベルで続けられています。その流れの中で、2004年10月31日東京・四谷にあるマリア大聖堂にて「義認の教理に関する共同宣言」の出版を記念してカトリック・ルーテルで合同礼拝が持たれたことは記憶に新しいことです。今回、ルーテル世界連盟 (LWF) の指名により 国際委員の一人として1995年以来、関わってこられた徳善義和氏 (ルーテル学院大学・神学校名誉教授) にお話を伺いました。

一致を目指して

1967年に始められた国際レベルの委員会は、エキュメニカルな実践を神学的に確認したり、あるいは実践に先駆けて神学的な一致を確認、方向づけを与えるという役割を果たしています。

これまで期を重ね、それぞれの成果を公にしてきました。第3期は「教会と義認」を取り上げて文書にまとめ、これが基となって「義認の教理に関する共同宣言」が両教会代表によって、1999年10月31日アウグスブルクにおいて公式に調印されるに至りました(教会代表によって署名された公式文書はこれが初めてです)。

「教会の使徒性」

私自身は、1995年から始めて、2005年秋に終了した第4期の委員の一人でした。第4期は、「教会の使徒性」を取り上げ、1995年から対話を続け、第10回委員会(イタリア・バリ)をもって文書をまとめ、私の任期を終えることになったわけです。

伝統的には、ルーテル教会は「教会の使徒性」をイエス・キリストの福音の使徒的証言とその正しい継承に見ているのですが、ローマ・カトリック教会は教皇と司教職における使徒の継承に見ているという大きな違いがありますから、神学対話においては新約聖書に遡って、その証言を相互に理解する

ことから始まります。そして、特に宗教改革以降の展開を相互に検討し、共通の理解、相互に認め合うことのできる違い、交互の隔たりを文書にまとめました。

対話を通して学んだこと

第4期の委員として神学的対話を通して私自身、以下のことを学びました。対話の中で必要なことは、共通するもの、一致する点を少しずつ見出し、それを広げて行く努力なのです。

まず互いにキリスト教信仰の伝統の上に立っていることを認め合うことが必要です。礼拝、祈り、洗礼、聖餐、説教など手がかりになることは様々です。その上で基本的な合意に至ることが必要です。信仰の中心になるものを共有していることを共に確認するのです。そのためには聖書に立って、福音の中心をどのように表現しているかを互いに学びあうことが大切です。さらには、その確認から、自らの教会の伝統も見つめ直してみる必要があるでしょう。そればかりでなく、率直に相互の違いについても話し合っ、共通だと確認したところに基づいて、相互の違いを認め合うことも必要なのです。違いの中には、さらに対話を深めてもっとよく理解しあうことができるようになる課題を与えてくれることもありますから、そのような課題を以後の対話のために確認することも大切です。

「義認の教理に関する共同宣言」もこうした諸点をしっかり踏まえた構成になっています。自分たちの考えるところに全面的に従うことを求めたり、互いの多様性が並立することを認めたりするだけでは、エキュメニカルという点で何も言わないのと同じことで、エキュメニカル運動の進展はないでしょう。

ブラジル宣教40周年

昨年10月30日(日)に、サンパウロ教会40周年の記念礼拝は行われました。今から40年前、宗教改革記念礼拝が、サンパウロ教会の出発です。当日は、大勢の方がお祝いに駆けつけてくれました。説教は、ブラジル・ルーテル告白福音教会(IECLB)の元教区長であり、日本福音ルーテル教会宣教100周年の時、熊本に来られたM. ヒッター先生でした。特別出演で、今、ブラジルで活躍しているプロ歌手、青木カナ姉が独唱してくれました。また長年の功労に感謝し、4名の方に感謝状と記念品を贈呈しました。

一言で40年、長いようで短い月日です。しかしサンパウロ教会は、一時の閉鎖という憂き目に遭いながらの今日です。

会員の皆さんにとっては、一人の感慨であったことでしょう。元宣教師の方々の厚い励ましを頂きましたこと、感謝に耐えられません。(渡邊進)

右・ヒッター氏を囲んで記念撮影下・演奏する青木カナ氏



岡山市「まちづくり賞」受賞

第10回 岡山市まちづくり賞 建築部門に日本福音ルーテル岡山教会が選ばれ、去る11月16日に岡山市役所にて表彰式が行われました。

同賞は美しい都市景観の創出や市域の魅力あるまちづくりに貢献している建築物などを表彰しており、10回目を迎えた今年は過去最多の39件の推薦・応募がありました。受賞講評は以下の通りです。

「礼拝堂の上の十字架がなければ、教会とは思えないかもしれません。地域のコミュニティ施設かと思われま。設計意図にもそのように記してありました。

道路に面した大きな開口部からは、内部で働いている人々がそのまま見えます。ゆるい傾斜のある前庭の使われ方が気になるし、楽しみです。

牧師邸を区画する古い枕木の塀は強すぎる気もするし、アクセントになっているとも思われます」



CONTENTS

目次

- 1 ルーテル/カトリック共同委員会
ブラジル宣教40周年/まちづくり賞受賞
ルターへの街から
- 2 牧師の声・信徒の声、出版案内
求道者の旅 10. ケネス・J・デール
- 3 聖研10. 弱さの中の力
PM21、アメリカ研修報告
- 4 議長コラム、ルーテル協議会
LWF 会議報告、モニター募集
年間行事、会議のお知らせ
集計表のお願い、住所変更、訂正

福音版

- 1 [「バイブルメッセージ あなたは知っていますか？」](#)
- 2 [「聖書人物伝 10! アダムとイヴ」](#)
ここに寄り添って共に歩いてみよう
[たろこままの子育てブログ](#)



ルターへの街から

旧ヴィッテンベルク市の東端から大学通りを西に向かうとメランヒトンハウス(記念館)があります。入口が目立たず、通り過ぎてしまいがちです。

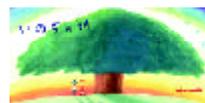
メランヒトンは1497年生まれ、わずか12歳で大学に入学、14才で卒業、17歳で古典語と天文学のマスターとなり、1520年、21歳でヴィッテンベルク大学哲学部の教授として招かれます。

すでに宗教改革を起こしていたルターの協力者となりましたが、神学も学び、牧師の按手も受けました。ルターの死後はメランヒトンが宗教改革を担って行きます。このとき、カトリック側でなく他の宗教改革各派との調停がありました。

そのことで、メランヒトンは妥協的だとか、後世の批判を受けました。しかし、絶対譲れないところは保持し、ルターの言う、どうしてもよいところは譲って和議に導く、まことにルター的な人でした。

森 優もりまさる / ルター・シュタット・ヴィッテンベルク、ルター研究所(株)
*ルターセンター www.luther-zentrum.de

Teensの詩が本になりました



第13回 全国春のティーンズ
キャンプで参加した72名の
ティーンズが表現しました。
「いのちの詩」
(A4変形140ページ)
一部 500円
申込は、宣教室TNG-Teens
佐藤和宏まで
email:kz-sato@jelc.or.jp

JELC+JELC 共同プログラム グループ・ワークキャンプ 2006 参加者募集

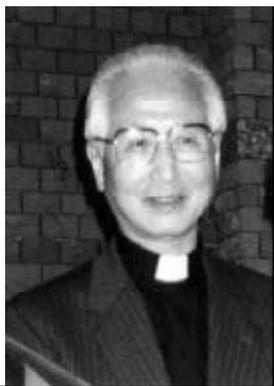
以下の内容で参加者を募集
しています。
締め切り:2006年1月31日
問合せ・申込用紙請求先:
日本福音ルーテル社(JELC)
〒150-0013
東京都渋谷区恵比寿1-20-26
電話:03-3447-1521
FAX:03-3447-1523
email:jela@jela.or.jp

TNG サポーター 募集

次世代のための活動のさらなる
展開のためにあなたの力を必要
としています。
TNGサポーターになってあなた
も次世代への伝道と育成の働きを
応援しませんか?

Information

発行所 東京都新宿区市谷砂土原町1-1
〒162-0842 電話03-3260-8631
日本福音ルーテル教会事務局広報室
振替口座 00190-7-71734
ホームページ <http://www.jelc.or.jp>
E-mail jelc@jelc.or.jp
発行人 徳弘浩隆 tokuhiro@jelc.or.jp
印刷人 精文堂印刷株式会社(定価1部40円)



東海教区

富士教会

牧師

献身

～神の内なる声を聞いたとき～

MIYAMOTO Takeshi
Pastor <牧師の声>

ある日その宣教師から来年神戸ルーテル聖書学院で学ばないか授業料その他すべて用意されているとお言葉でした。

「1週間考えた末お断りすべく宣教師館を訪ねました。先生は議論するタイプではなく、わかりました。それではルカ福音書10章38節から42節を読んでください。一緒に祈りましょ」と言われました。

私の10代は重苦しい数々の荷を背負った苦悩の日々でした。そんなとき、ノルウェー人の宣教師によって信仰に導かれました。50年以上も前の話です。

牧師になる前は何をされてきましたか？

「わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を守り抜きました。『テモテ4-7』という言葉と共に、牧師人生を終えたいと願っております。」

「わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を守り抜きました。『テモテ4-7』という言葉と共に、牧師人生を終えたいと願っております。」

め「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアはその良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。42節、口語訳」というところを読み終えたとき、この言葉が電撃的に私の心を突き刺しました。自分は何んと計算高く卑しい考えを持ってここに来たのだらう。その場で涙と共に祈り、聖書学院行きをお受けしました。牧師の道に向かう原点でした。

MIYAMOTO Takeshi
Pastor <牧師の声>

「わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を守り抜きました。『テモテ4-7』という言葉と共に、牧師人生を終えたいと願っております。」

「わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を守り抜きました。『テモテ4-7』という言葉と共に、牧師人生を終えたいと願っております。」

め「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアはその良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。42節、口語訳」というところを読み終えたとき、この言葉が電撃的に私の心を突き刺しました。自分は何んと計算高く卑しい考えを持ってここに来たのだらう。その場で涙と共に祈り、聖書学院行きをお受けしました。牧師の道に向かう原点でした。

Interview — 1月

NHKで何度も放映されましたが、瀬戸内寂庵氏の本も読みました。登場人物が多くて、訳がわからなくなりました。対談集など回りのことを読んでいる内に歴史的背景がわかって、どんどん面白くなりました。

徳川美術館が、今年開館70周年を迎え、『国宝の源氏物語絵巻』『復元された絵巻』など記念特別展があることを知りました。そこで、徳川美術館で鑑賞しながら、お隣の復活教会女性会との交流を計画、実現したのです。

「わたしは、戦いを立派に戦い抜き、決められた道を守り抜きました。『テモテ4-7』という言葉と共に、牧師人生を終えたいと願っております。」

求道者の旅 A SEEKER'S JOURNAL

第10回 人間の新生



ケネス・J・デール ルーテル学院大学名誉教授 引退宣教師

Q. 人生の最大の関心事は何でしょうか？
A. 救われるか否かということです。義認とは、私たちの罪が神より赦され、キリストの義が私たちに与えられることです(小教理問答集解説より)。
今まで罪深い人間の性質を見てきました。今回は「救われる」ということについて考えたいと思います。
「あるがままの自分」
私の心を畏れで満ちし喜びを胸に溢れさせるものは何なのでしょう。それは、神の驚くべき善性、すなわち、混乱した感情、自己中心と無関心にもかかわらず受け入れてくださる神の驚くべき受容です。ありのまま受け入れて下さる事を、福音書は教えてくれます。この慰めに満ちた信頼の内に、より良い

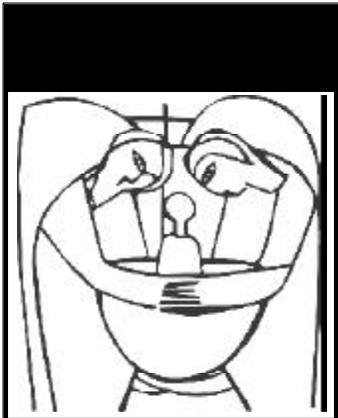
生を生きる希望と目標を見出すのです。善を求めようとする気持ちが、過去からの解放へとつながるのです。この「受容されている」事が、クリスチャンとしての新生の本質です。
最も難しい事は、確かに受容されていると言う事を知る事です。何故、不安な気持ちに苛まれ、神に見放され、御前に近づく価値もないと感ずるのでしょうか。この気持ちから完全に解放される事、すなわちあるがままの自分で本当に良いのだという確信、真理の気づきによってのみ、惨めな状況は克服され得るのです。自分以上にはなりえないのです。これが私の「信仰義認」「罪の赦し」の経験です。
神は、私たちの弱さ、頑なさに関わらず愛してください。神は人間がいかにか原始的で、動物的であるかをご存知です。そのようにお創りになられたのです。神が唯一お赦しにならないのは、傲慢です。

人間の弱さを否定し、創造主に頼む事の必要性を否定する事です。
カヌーの喩え
日々の歩みはゆるやかに流れる川のほとりを歩く人に似ています。人は下流を目指してカヌーを運んでいます。二つの選択があります。カヌーを川に浮かべ、苦もなく目的地まで流れに身をゆだねること。あるいは、舟を水につけることを拒み、背中に負って川岸を歩いていく事です。きっと疲れきってしまいます。
川の流れは、その浮力を信ずることを待つておられる、神の御力の流れです。人生の重荷を何故、自身自身で担おうとするのでしょうか。
(翻訳：上村敏文)



弱さをさらけ出す
パウロはこのような教会の

トと言われ、文化的にも経済的にも豊かな都市でしたが同時に繁栄する町に在りがちな退廃的な雰囲気を感じていました。この町の教会も多分にその影響を受けて、偶像礼拝や性道徳の乱れ、人種差別問題の他、教会内分裂騒ぎなども抱え込んでいたことがコリントの信徒への手紙を通して知ることが出来ます。初代教会の中では最も問題の多い教会と言ってもよいほどでした。



聖書研究

10 弱さの中の力

文 賀来周一

の人々に理を尽くして論じ立派な教会の姿を取り戻すようにと教育をするようなことはしませんでした。彼が取った態度は徹底して自らの弱さをさらけ出すこと（ギリシア北部地方に着いたとき、わたしたちの身には全く安らぎがなく、ことに苦しんでいました）（7章5節）と伝道者らしくからめ弱音を吐き、わたしのことを、手紙は重たく力強いが実際に会ってみると弱々しい人です。しもつもらない」と言っている（10章10節）と正直につぶやいています。さらに

キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いられます。

状態を見て、何とかしようと腐心したことが手紙にうかがわれます。パウロの心配にさらし追いつかせるかのように、彼はコリントの教会から非難を受けていました。この手紙を書く前、コリントの教会を訪ねると約束をしていたのですが、彼なりの理由があつて訪問を延期したからです。そのために彼は約束を破ったとなじられていたので（1章12節以下）。「わたしは悩みと怒りに満ちた心で涙ながらに手紙を書きました」（2章4節）の一文はその心境を表わしています。このままでは済まされない事態の中でパウロはコリント

は日々わたしに迫るやつかい事あらゆる教会の心配事があります（11章28節）と嘆くのです。書簡の至る所にパウロの弱さが見えるので、ある学者がパウロは教えの論理ではなく、弱さの論理でコリントの教会を変えようとしていると言っているのもなるほどと首肯します。

弱さこそ恵み

彼は弱さを逆手にとって弱さがあればこそ見える真実があることを明らかにしようとしているのです。その典型的な箇所を12章7節に見ることが出来ます。わたしの身に一つのとげが与えられましたが、それは思い上がらないようにわたしを痛めつけるためにサタンから送られた使用です」とあります。この「とげ」は何であるかはさまざまな解釈がありますが、よく分かりません。中にはパウロは言語障害であったという人もいます。三度も取り去ってくださいと神に願ったとありますから、彼にとつて余程辛いことだったにちがいないと推察します。

弱さこそ力

信仰の強い人は自分が弱い、信仰の弱い人は自分が強いといわれます。強さが残つていれば、彼の外にある存在に気付くことはないでしょう。自分に頼るからです。そうならば、自分の強さが優先します。だから信仰が弱くなるのです。信仰は、弱さを強さに変えるのではありません。自分が強くなれば、自分が見えなくなりますが、キリストを見失いません。人は弱さの中にいてこそ、キリストの力を鋭く敏感に受けることができます。

しかし主は言われました。「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」（12章9節）。神は強さではなく弱さを働き場とされます。弱り果てれば、弱り果てるほど、人はその窮乏を外から見る存在に敏感です。弱さに徹すれば、徹するほど自分の外から働きかける力に鋭く反応します。パウロは、自らの弱さを通して彼に働かれるキリストの力をみました。見よつとして見たのではなく、限りなく自分の強さが0になれば、キリスト

以外に見る存在がないのです。そのお方を見ざるを得ないといつてよいかもしれませぬ。

新しい年を迎えるにあたって、弱さに徹する生き方もあつてよいのではないのでしょうか。

召し出される私-信徒と教職の新しい協働へ
次回教職神学セミナーは、信徒参加も歓迎!

40回目を数える教職神学セミナーが2006年2月13日(月)~26日(木)に、ルーテル学院大学で開かれます。今回のテーマは、「召し出される私-信徒と教職の新しい協働へ」で、今回は信徒の参加も大歓迎との事です。

PM21でも、信徒について学んでいるところです。私たちが一人ひとりに信徒として神様から与えられた賜物を用いて、それぞれの現場での神様と人への奉仕が願われています。そして教会では、決して「お客さん」としてではなく、牧師と協働して教会の宣教に携わるよきパートナーとしての「信徒像」が確認され、信徒宣言でも何度も練り直されているところです。

講師は、PM21のP2(信徒)部門責任者の斉藤末理子さんも奉仕されますし、ルーテル以外にも信徒として働かれるNCC議長鈴木伶子さん、カトリック教会高柳俊一神父も招き、幅広い視点からの学びの機会が与えられます。宣教室からもお勧めいたします。是非、ご参加ください。

申込締切は、教職は2006年1月16日(金)まで、信徒は会場にて直接申し込みの事です。

信徒宣言21 ご意見お寄せください
 信徒宣言21の修正案を12月号に掲載しました。どうぞ、ご覧ください、ご意見をお寄せください。

「リター」紋章つきの受胎証など...お声を募集!
アクセラプロジェクトで 宣教推進グッズを

教会の現場からよく問い合わせを受けることで「ルーテル教会のオリジナルの受胎証はありませんか?」と言うことがあります。また、同様に「聖証証」、「教保証?」書籍書類など...もあれば良いのという声を聞きます。もっと話が広がれば幼稚園・保育園で使える、献金袋や幼児聖証(七五三)のカードやキャンディー袋などもあればうれしいというお声も聞きます。カトリックではたくさんのカードやマリア様の千歳袋がありますね。

宣教室でも苦慮も考えましたが、現場が使いやすいものなら作成しようということになりました。そこで是非お声を教えてください。

「こういうものが欲しい!」「こういうデザインでこんな文章の入ったものでない」と困る「昔こんなのがあつてもよかった。また、これなら手に入るから作らなくてもこれを使えばいいのでは...」など、そして、宣教室で扱っている各種教材やグッズまで道草くらぶなどの諸事も、一覧できるカタログを作り、常時、分かりやすく選んでいただけるようにしたいと考えています。ウェブ上にも掲載予定です。

できれば4月ごろを目途に徐々に提供を始めたいと考えています。

宣教室までメールやFAXでお寄せください。宜しくお願いたします。

アメリカ研修報告
 2005年11月14日~22日
 アメリカ・ミネソタ州

昨年11月、日本における聖書教育教材及びプログラムの開発を目指し、アメリカ・ミネソタ州を訪問しました。今回の研修は、JEA/JEC共同プログラムの一つとして企画され、一般公募でしたが、残念なことに応募者がなく、D パーソン牧師、安井宣生牧師(本郷教会)、岡田実紀氏(宣教室ユースワーカー)、佐藤千葉教会の名での研修となりました。派遣し、支援して下さった日本福音ルーテル教会、日本福音ルーテル社団と皆さんに感謝します。

フェイス・インキューバーという信仰教育教材とプログラムを開発する会社を訪ね、聖書教育の教材及びプログラムについて話を聞く機会が与えられました。実に興味深く、教材やプログラムはもちろん、彼らスタッフの考え方や信仰そのものに打たれました。また、教材を客観視するためにも、実際に教材を使っている教会を訪問し、体感することができたことは大きな喜びでした。

日本の現実を思うとき、これらアメリカで開発、実践されている教材やプログラムをそのまま輸入することはできません。宗教的な背景や環境が大きく異なるからです。しかし、聖書を控えた子どもたちが積極的に喜んで学ぶプログラムとして有効であると感じ、開発に取り組んでいきたいと考えています。

今後の課題として、今回の研修で得たものをいかに日本化するかということ、これまで各教区でも開発された教材を結集し、いかに活かすかということ、そして誰もが使える教材にしていくことなどがあげられます。

写真左:フェイスインキューバーの代表R.メルハイム牧師
 写真上:聖書教育を実施している教会を訪問

